

フィレンツェと東京、量と色彩をめぐる旅の中で

フランチェスコ・モレーナ

広島、京都、フィレンツェ、ローマ、東京、、、

道原聡の旅はイタリアと日本の間を行き交い続いていく。

この二つの国は彼の人生を決定づけた。そして言うまでもなく、彼の芸術も。

道原聡はヒロシマに生まれた。

非人間的な残虐性が極限にまで達したことを示す象徴的な都市。我々が未来永劫にわたり忘却することができない都市。

彼にとって出身地ヒロシマの意味は大きい。

おそらく彼の作品の中で最も見る者の心に迫ってくるのは、2010年に描かれた原爆ドームの「肖像」（それはまさしく肖像である）であろう。（注「Hiroshima ゆうちゃんの三輪車」）

この絵は悲劇に対するオマージュというよりも、むしろ再生し継続してゆく生命に対する賛歌のように見える。

それはおそらく、彼の作品にコンスタントに現れる赤・黄色・緑・オレンジ・紫といった鮮やかな色彩からくるものであろうし、あるいは破滅の象徴の建物の前の小道に謎めいて現れるエルネスト・ユウスケの三輪車からくるもの、あるいはまた蛮行に対する嫌悪にもかかわらず、動じずに生命の鼓動を打ち続けるかのような、小さなピンク色をしたハート形の低木からくるのかもしれない。

彼が愛する第二の故郷トスカーナから送るメッセージとして、生地ヒロシマの記憶が語られる。原爆ドームの背景には、トスカーナの糸杉や笠松さえも出現し、それはあたかも「ヒロシマ・モナムール（ヒロシマ、わが愛）。トスカーナ・カーザミア（トスカーナ、わが家）」と言っているようだ。

彼が多くを学んだ市立芸術大学のある京都と広島は、約300kmの隔りがあるが、その後彼が移り住むことになるフィレンツェと日本の美しい古都の隔りが約10,000kmであることを考えれば、それは取るに足らないものと言えるだろう。

フィレンツェはルネッサンス芸術の揺籃の地であり、京都に劣らず魅力的な都市である。

もはや人生の大半になる30年前、何度も夢に見た土地に到着する人のように、彼は感激とともにその旅をした。

そしてフィレンツェ国立アカデミア美術学校で彼の修行時代が終了し、彼はイタリアに第二の故郷を見つけた。

イタリア芸術の巨匠の土地において、威厳を持ち悠然と歩を進めるかのような典型的なイタリアの自然、なだらかな起伏のあるトスカーナの丘陵地帯に彼は溶け込んだ。

そしてなによりも、ルネッサンス芸術の巨匠達と豊かな対話を深めていった。

数学の天才や遠近法や光や明暗図法の巨匠達、とりわけ、数と比率の法則を希求したピエロ・デッラ・フランチェスカ。

道原聡は、イタリア絵画の偉大な父たちとの比較対照を避けるのではなく、むしろ進んで、その教えを試そうとしているようだ。

中世の丘上都市を描いたデリケートな円形の絵は、明らかにアレツォのサン・フランチェスコ教会にあるピエロ・デッラ・フランチェスカの壁画「聖十字架伝説」の部分からの引用である。ルネッサンス美術の規範原理に対する考察は、テーマの綿密な調査にとどまらない。道原は、特に、シンプルな基本構成要素がバランスよく重なり合いながら構築されてゆくという稀有な伝統を持つイタリア絵画を内面化することに成功した。

トーレキアーラ城、フィレンツェの大聖堂、ローマのコロッセオ、ピサの奇跡の広場など、彼の最新の作品には、イタリアの古典的建築物の幾何学的実験が、大きな成果を上げている。彼は、立方体、平行六面体、角錐（かくすい）をまるで代数の体系のように扱う。それはまるで子どもがレゴを使って遊ぶような自然な感覚である。

ゆえに彼の絵は、冷たく計算されたよそよそしいものではなく、情熱にあふれ、心を打ち、構築密度が高く、色彩は温かく晴れやかである。

その同じシンプルさと効果的表現をもって、彼は生まれ故郷日本の建築物も描く。白鷺のように光り輝く堂々とした姫路城。パーフェクトなメカニズムのように威圧的な赤煉瓦の東京駅。日本の大都会の未来的風景にそそり立つ東京タワー。

その結果、風景の中に不動の建築物が夢のように浮かび上がる。塔やクーポラの研ぎ澄まされた表面はゆっくりとしたリズムを生み、空の雲もそれに合わせて時間を超越しているかのように見える。

このコンセプトはジョルジョ・デ・キリコにより既に試みられたものであるが、道原のいくつかの作品には形而上絵画の影響を強く感じることができる。

たとえば部屋の中にロマネスク様式の教会が箱庭のように置かれている作品。

ルネッサンス絵画によくある背景の開かれた広い窓の向こうには丘陵風景が続いていく。右下隅にはアジアとヨーロッパと北アフリカをこちら側に向けている地球儀が置かれていて、左の窓枠にはおそらく上着と思われる柔らかそうな布が置かれている。心理状態の表れか、存在状況の反映か、思想の片鱗か、作者のみぞ知る。

教会の前には再びあの柔らかいピンクのハート形の低木が植えられている。

ピエロ・デッラ・フランチェスカをはじめとするイタリアルネッサンス芸術の主人公達、ジョルジョ・デ・キリコ、分析的構図のオットーネ・ロザイ、1900年代半ばのローマの画家たち、とくにモランディの影響を受けていた時期の情動的なローマ風景を描いたフランチェスコ・トロンバドリー。

これらの画家たちが、道原聡の絵画の源泉になっているように思われる。

しかし彼は日本人として生まれた自国の芸術の伝統からの影響は全く無いのであろうか？

彼の絵に日本精神は全く見えてこないのだろうか？

いや我々は、全体的に彼の絵に感じられる僅かなメランコリックな雰囲気は、特に二十世紀前半の温かい色調の日本画との間に共通性を垣間見ることができると思う。思いつくままに名前を挙

げてみるならば、松岡映丘や安田靉彦、前田青邨など、もちろん彼らが描いている主題は純日本的な人物像であり、それにたいして道原聡が描くのはイタリアの建築物という違いはあるにせよ。これら二十世紀前半の日本画家の起源をさかのぼっていくと日本絵画の原点に至る。すなわち平安時代に既に最盛期を迎えた日本列島で独自に生まれた「やまと絵」である。そこには既に短縮法的で鳥瞰図的な建築物が描かれている。

優雅な色彩と柔らかい描線の「やまと絵」。このフィレンツェ人化した日本人画家が愛してやまないトスカーナ地方の柔らかい起伏の丘陵風景と全くかけ離れているわけではない関西地方のなだらかな山々の稜線。物語絵画の構成要素に全くふさわしい丸い笠松と膨らんだ雲。

おそらく、それらの中に道原聡の絵画表現の無意識的根源を探し当てることができるであろう。

「やまと絵」特有の古典的な「絵巻」の手法を用いず、ヨーロッパ的な絵画形式を使っているとはいえ、道原聡の最近の作品には物語的要素が見て取れる。もし彼の物語を「絵巻」の手法で描いたら、どんなすばらしい効果が生まれるのであろうか。

道原聡の最新作には、単に絵画スタイルの再発見という要素だけではなく、人間が生み出したテクノロジーの発展史の初期段階における小さな奇跡が登場する。

かならずと言っていいほど最近の作品に現れるのは、空と雲を横切って飛んでいく赤と白と緑のイタリア三色旗のシンボルをつけた小さな飛行機である。

道原聡は、きっとアンサルド SVA 複葉機の歴史に、心を揺り動かされたに違いない。彼の絵を見てそれに気が付かない者はいないであろう！

今から約一世紀前の 1920 年、外見だけはもろく脆弱そうに見える木と布と鉄でできたこの軽飛行機は、人間の歴史上最も伝説的な偉業を成し遂げた。つまり、航空の歴史の黎明期においてローマ-東京間の信じられないような飛行を遂行したのである。

この奇跡は、単に飛行機を設計し構築した技術者たちの能力によるものだけではなく、むしろそれを実行した先駆的パイロットたちの勇気によるものが大きいであろう。

とりわけアルトゥーロ・フェラリンは、運命的な 1920 年 5 月 30 日にまず大阪に、そして翌 31 日に東京に第一歩を印したパイロットとして名を残した。

神話的要素に満ちたこの飛行機のストーリーに道原聡は無関心ではいらなかった。なぜなら彼自身、航空ではなく絵画において、イタリアと日本をつなぐ者であろうとしているからである。今から約 100 年前、彼ら技師やパイロット達はイタリア文化と日本文化の間に橋を架けることに成功した。

ちょうどいま、道原聡はそれを、若きフェラリンのごとく、彼の絵画を通じて為そうとしているのだ。